The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

対象認識と自己認識の区別について

村　上　徳　樹

0．はじめに　自己認識（svasaṃvid, svasaṃvedana/ rang rig）の問題に関して，ゲルク派（dGe lugs pa）の学僧達は「知であるならば，必ず〔知〕自体に対して自己認識知覚である（shes pa yin na rang gi ngo bo la rang rig mngon sum yin pas khyab）」という説を否定している．この説はツォンカパ（Tsong kha pa bLo bzang grags pa, 1357-1419）による講義の備忘録として著された『量の大備忘録』(*Tshad ma'i brjed byang chen mo*)や，ギェルツァプジェ（rGyal tshab rje Dar ma rin chen, 1364-1432）が著したその他の論理学書，および，ケードゥプジェ（mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1385-1438）が著した論理学書において批判され，その後もゲルク派の学僧達によって否定され続けた．

この批判についてはDreyfus［1997］で既に検討されており，同批判はサキャ派(Sa skya pa)の自己認識理論を否定したものであることが明らかにされている[1]．本論文では，同説がいかなる自己認識説であったのか，また，両学派の相違点はどこにあったのかを検討してみたい．

1．いかなる説を否定しているか　まずは，同説が具体的にいかなるものであるのかを検討する．ギェルツァプジェやケードゥプジェの批判を検討すれば，同説は，知が知それ自体（rang gi ngo bo）を認識するという自己認識説を批判していることがわかる[2]．眼識を例えとするならば，眼識は対象認識であり，自己認識ではない．しかし，眼識が眼識それ自体を認識する場合，眼識は対象認識であると同時に，自己認識となる．このように同説は，眼識や分別知である推理を含めたあらゆる知が，眼識それ自体，推理それ自体を認識する自己認識である．また，同説では次のように知自体（rang gi ngo bo）が能取の形象（grāhakākāra / 'dzin rnam）を意味している．

> 全ての外部を認識する〔知〕(phyi blta) は，内部を認識するもの（nang du bltas pa）であると語ることは妥当ではない．〔もし〕私達はそのように語っていないと言うならば，全ての外部を認識する知（kha phyir blta'i shes pa thams cad）も，〔知それ〕自体である能

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

取の形象に対して（rang gi ngo bo 'dzin rnam la）自己認識知覚である〔というあなたの主張〕は損なわれる．（*rNam nges ṭik stod* 69b3-70b2）

このような内容から，同説はロントゥン（Rong ston Shākya rgyal mtshan, 1367-1449）の自己認識説に相当しているのではないかと考えられる．ロントゥンの自己認識解釈については，既に村上［2006］において検討したが[3]，彼は「所取の形象に対する自己認識説」および「能取の形象に対する自己認識説」という二つの自己認識解釈を打ち出していた．そのうちの後者がここで批判される自己認識説であると推定される．

同説によれば，眼識を問題とした場合，眼識は対象の形象を認識すると同時に，眼識それ自体である能取の形象を自己認識する．この解釈では，眼識は本来，対象認識であるが，自己認識でもあることになる．ギェルツァプジェやケードゥプジェはこのような対象に関わるはずの認識を自己認識と混同する解釈を否定しているのである．

2．見解の相違点　自己認識解釈の難しいところは，そもそも単一の知であるにもかかわらず，その単一の知が対象を認識する働きと知自身を認識する働きという二つの機能を合わせ持つということをいかなる点で区別するかにある．それをケードゥプジェの三縁（所縁縁，等無間縁，増上縁）についての解説を用いて説明したい．

〔色形を把握する〕眼識のようなものにも，自己であるところのものである，感受し，照明しつつ認識する側面（rang gi ngo bo myong ba gsal rig gi cha）と，色形の形象を持つものとして生じている側面（gzugs kyi rnam ldan du skyes pa'i cha）と，色形だけを把握するものとして限定されており，音声などを決して把握しえないものという三つの特性がある．（*Yid kyi mun sel* 62a4-5）

これは，経量部の学説における三縁（等無間縁，所縁縁，増上縁）についての解説であるが，三縁の内の等無間縁によって生み出される「自己であるところのものである，感受し，照明しつつ認識する側面」が能取の形象であり，所縁縁によって生み出される「色形の形象を持つものとして生じている側面」が所取の形象である．この記述の中で難解であるのは，下線を引いた「自己であるところのものである，感受し，照明しつつ認識する側面（rang gi ngo bo myong ba gsal rig gi cha）」という箇所である．この「自己であるところのもの（rang gi ngo bo）」と「感受し，照明しつつ認識する側面（myong ba gsal rig gi cha）」という言葉は同格であり，rang gi ngo bo を目的語ととって「自己であるところのものを感受し，照明しつつ認識

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

する側面」と解釈してはならないと考えられる．というのは，ケードゥプジェ自身が，

> 諸々の知の自己であるところのもの（shes pa rnams kyi rang gi ngo bo）は，大抵，個々の知の能取の形象である感受し，照明しつつ認識する側面（'dzin rnam myong ba gsal rig gi cha）に対して述べられる．（*Yid kyi mun sel* 90a6）

と述べているからである．それではなぜ，自己であるところのものが，感受し，照明しつつ認識する側面，つまり能取の形象であるのか．それは能取の形象が知の本体とも呼べるものだからである．ケードゥプジェによって能取の形象は透明な水晶に喩えられる[4]．たとえば透明な水晶に青いものが近在している時，その水晶は青いものを写し出し，あたかも水晶とその青いものとは切り離しえないものであるかのように見える．その時に，青いものを写し出す本体となっているものは水晶である．また，能取の形象として表現される「照明しつつ認識するもの（gsal zhing rig pa）」というのは知（shes pa）の定義的特質（mtshan nyid）であり，もしも，その能取の形象が存在しないならば，それは知であるとは呼べないのである．このような点で，能取の形象は知の本体とも呼べるものであり，それ故に「自己であるところのもの（rang gi ngo bo）」と表現されていると考えられる．

そのような知の本体となっている能取の形象による照明作用が，等無間縁として間断なく連続している時，青いものが所縁となって，青いものが写し出される．この時には，本来的に無色透明の水晶のような能取の形象は，青いものの姿を持っているかのように見える．この青いものを写し出す水晶のような能取の形象が自己認識であり，その能取の形象が青いものを写し出している状態が所取の形象たる対象認識である．この二つの認識は「側面（cha）」と言われるように，単一の知における二つの側面であり，一定の方向性を持ったものである．つまり，能取の形象が認識内部で所取の形象を感受することが自己認識であり，その感受された所取の形象が同時に青いものを把握しているという方向性を有しているのである．他方，ロントゥンの解釈では，眼識は眼識それ自体を認識するという自己遡源性を有しており，その点をギェルツァプジェやケードゥプジェは批判していると考えられる．

ギェルツァプジェやケードゥプジェの解釈では，自己認識というものは，眼識が眼識自体を認識するとか，分別知が分別知自体を認識するというものではない．ケードゥプジェは次のように述べている．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

諸々の知の〔自〕体（ngo bo）は自己認識であるとか，諸々の知は自己認識を備えている（rang rig dang bcas pa）と語られるべきである．〔そうではなく〕諸々の知は〔知自〕体に対して自己認識（ngo bo la rang rig）であるとか，諸々の知は自己認識である（shes pa rnams rang rig yin）と語られるべきではない．（*Yid kyi mun sel* 94a2-3）

もちろん，自己認識という言葉が示す通り，知は知自身を認識するのである．しかしながら，彼等にとって自己認識とは自己遡源的に眼識が眼識自体を認識するとか，分別知が分別知自体を認識するといったものではない．そうではなく，眼識や分別知に本来的に備わっている能取の形象という本体のようなものが想定されており，そこに所取の形象が昇った時点で，その能取の形象による認識は自己認識と呼ばれるものとなるのである．

〈略号〉 *rNam nges ṭik stod* : rGyal tshab rje Dar ma rin chen. *bsTan bcos tshad ma rnam nges kyi ṭīka chen dgongs pa rab gsal gyi stod cha*. Ja pa, bKra shis lhun po ed. *Yid kyi mun sel* : mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po. *Tshad ma sde bdun rgyan yid kyi mun sel*. Nya pa, bKra shis lhun po ed. Dreyfus [1997] : *Recognizing Reality*, Albany : State of New York Press. 村上 [2006] :「所取の形象と能取の形象についてのケードゥプジェの解釈」『日本西蔵学会々報』52, 3-12.

1） Cf. Dreyfus [1997] 404-412.
2） Cf. *rNam nges ṭik stod* 69b3-70b2, *Yid kyi mun sel* 89b5-91a6.
3） Cf. 村上 [2006] 3-5.
4） Cf. 村上 [2006] 5-6.

〈キーワード〉 ギェルツァプジェ，ケードゥプジェ，ロントゥン，自己認識

（東京大学大学院修了）

NII-Electronic Library Service